

売春婦リゼット

岡本かの子

青空文庫

売春婦のリゼットは新手あらたてを考えた。彼女はベッドから起き上りあがざま大声でわめいた。

「誰かあたしのパパとママンになる人は無ないかい。」

夕暮は迫っていた。腹は減っていた。窓まど向うの壁がかぶりつ

きたいほどうまさうな狐きつね色いろに見えた。彼女は笑った。横隔おうかく

膜まくを両手で押おさえて笑った。腹が減り過ぎて却かえっておかしくなる

時が誰にでもあるものだ。

廊下越ごしの部屋から椅子直すしのマギイ婆ばあさんがやって来た。

「どうかしたのかい、この人はまるで気狂きちがいのように笑ってさ。」

リゼットは二日ほど廉葡萄酒やすワインの外ほかは腹に入れないことを話した。

廉葡萄酒だけは客のために衣裳戸棚クロゼットの中に用意してあつた。マギイ婆さんが何か食物を心配しようと云い出すのを押えてリゼットは云つた。

「あたしややけで面白いんだよ。うっちゃつといておくれよ。だがこれだけは相談に乗つとお呉れ。」

彼女はあらためてパパとママンになりそんな人が欲しいと希望を持ち出した。この界限かいわいに在あつては総すべてのことが喜劇げんしゆの厳げんしゆ肅く性せいをもつて真面目まじめに受け取られた。

マギイ婆さんが顔の筋すじ一つ動かさずに云つた。

「そうかい。じゃ、ママンにはあたしがなつてやる。そうしてと

——。」

パパには鋸のこがくし樂師のおいぼれを連れて行くことを云い出した。

おいぼれとただ呼ばれる老人は鋸のこぎりを曲げながら弾ひいていろいろなメロデイを出す一つの芸を渡世とせいとして場末ばすえのキャフェを廻まわつていた。だが貰もらいはめつたに無かつた。

「もしおいぼれがいやだなんて云つたらぶんなぐつても連れていくよ。あいつの急所は肝臟かんぞうさ。」

マギイ婆ばあさんは保証した。序ついでに報ほう酬しゆうの歩合ぶあいをきめた。婆ばあさんは一応帰つて行つた。

リゼットは鏡むかに向つた。そこで涙が出た。諺ことわざの「ボンネットを一度水車小屋の磨ひきうす白ほうに抛り込んだ以上」は、つまり一度貞操ていそうを売物にした以上は、今さら宿命しゆくめいとか身の行末ゆくすえとかそんな

素しろ人ろうと臭なげいなげ歎なげきは無い。ただ鏡がものを映うつし窓掛まじかけが風かぜにふわふわ動く。そういうあたりまえのことにひよいと気がつくとは何とも知れない涙が眼の奥から浸にじ潤みみ出でるのだ。いつかもこういう事ことがあつた。

掛布かけぶとん団だんの端はしで撥はねられた寝床ねどこ人形にんぎょうが床ゆかに落おちて俯うつむ向きになつていた。鼻を床につけて正直にうつ向きになつていた。ただそれだけが彼女を一時間も悲しく泣かした。

涙と寝垢ねあかをリスリンできれいに拭ふき取とつてそのあとの顔へ彼女は「娘」を一人絵え取り出でした。それは実際にはありそうも無い「娘」だつた。曲馬きよくばの馬うまに惚ほれるような物語の世界にばかり棲すみ得る娘であつた。この嘘うそを現在の自分として今夜の街に生きる

不思議を想うと彼女は嬉しくて堪らなくなった。彼女はおしろいを指の先に捻じつけて鏡の上に書いた。

「わたしの巴里！」

マギイ婆さんとおいぼれがやって来た。二人とも案内見られる服装をしてやって来た。この界隈の人の間には共通の負けん気があった。いざというときは町の小商人にヒケはとらないという性根であった。その性根で用意した祭の踊に行く時の一張羅を二人はひっぱって来た。白いものも洗濯したてを奮発して来た。

三人はそこで残りの葡萄酒を分けて飲んだ。

「わたしの今夜の父親のために。」

リゼットは盃さかずきを挙げた。

「わたしも今夜の愛する娘のために。」

鋸のこがくし樂師は肝臟おきを押えながらぬかりなく応答した。

リゼットはマギイ婆さんに向つても同様に盃むかを挙げた。それに対して婆さんは盃を返礼した後い云つた。

「だがこのもくろみをレイモンが知つたら何と思うだろうね、リゼット。」

リゼットはさすがにきまりの悪さを想像した。彼女の情じょう人にんは一いさい「技術」というものを解げさない男だった。彼女は云いつた。

「まあ、知れるまで知らないことにしようよ。あいつに玄人くろうとのやることはめつたに判わかりやしないから。」

三人は修繕しゅうぜん中のサン・ドニの門を潜くぐつて町の光のなかに出た。リゼットの疲れた胃袋に葡萄酒ワインがだぶついて意地の悪い吐気はきけが胸を逆にしごいた。もし気分がそのまま外に現あらわれるとしたら自分の顔は半腐はんぐされの鬼婆おにばばのようなものだろう。彼女は興味を持つて、手提鞆てさげかばんの鏡をそつと覗のぞいて見る。そこには不思議な娘が曲馬団きよくばだんの馬を夢みている。この奇妙さがふたたびリゼットへ稼業かぎように対しての、冒険の勇氣を与えて彼女は毎夜まいよのような流ながし眛めを八方に配り出した。しかも今夜の「新らしい工夫」に気付くと卒然そつぜんと彼女の勇氣が倍加ばいかした。

リゼットは鋸楽師のこがくしの左の腕に縋すがつておぼこらしく振舞ふるまうのであつた。孤独こどくが骨まで浸しみ込んでいる老楽師はめずらしく若い娘

にびたと寄り添われたので半身熱苦しく煽あおられた。彼はそれを防ぐように左肩を高く持もち上げ鼻の先に汗を搔かいた。うしろから行くマギイ婆さんは何となく嫉妬しつとを感じ始めた。

ポアツソニエのグランブルーヴァル大 通 はもう五色ごしきの光のやりぶすま槍 襖むすまを八方

から突つきだしていた。しかしそれに刺さされ、あるいはそれを除よけて

行く往来の人はまだ篩ふるいにかけられていなかった。ゴミが多かった。

というのは午後十一時過ぎのように全まく遊あび専門の人種になり切

つていなかった。いくらか足あしなみ並なに余裕を見せている男達も月賦げつぷ

の衣い裳しよう屋やの飾かざり窓まどに吸す付いつている退ひ刻け女ミジ売ネット子の背まわ中ちゆうへ廻まわつ

て行いつた。商売女には眼もくれなかった。キャフェでは給仕男ギヤルソン

たちが眺めのいい窓の卓テーブル子ブルへ集あまつてゆゆつくり晩飯を食べてい

た。当番の給仕男が同僚たちに客に対すると同様に仕付けよく給仕していた。

「今日は遊びかね。」

という声が出た。すぐそれは探偵であることが判った。リゼ

ットは怖くも何とも無かつた。この子供顔の探偵は職業を面白が

っていた。リゼットが始めて彼に捉えられてサン・ラザールの館

すなわ ろうや

——即ち牢屋へ送り込まれるときには生鳥の鶉のように大事に

された。真に猫を愛する猫人は獲ものを残酷に扱うものでは

ない。そして彼女が鑑札を受けて大びらで稼ぎに出るとなると

この探偵は尊敬さえもしてくれた。尊敬することによつて自分が

一人前にしてやった女を装飾することは職業に興味を持つ探

偵に取つて悪い道楽ではなかつた。

「可愛い探偵さん。鑑札はちやんと持つててよ。」

リゼットはわざと行人に聞えるような大きな声を出した。

「ああ、いいよ、いいよ、マドモアゼル。」

彼は却つて面喰つた。だがその場の滞を流すように、

「今日は僕も休日さ。」

といつてちよつとポケットから椰子の実を覗かして向うへ行つた。多分モンマルトルの祭の射的でも当てたのだろう。

モンマルトルへはリゼットは踏み込めなかつた。ポアツソニエの通りだけが彼女に許された猟区だつた。その中でもキャフエ

——Rが彼女の持場だつた。この店へは比較的英米客が寄り付く

ので 献立表こんだてひょうにもクラブ・サンドウィッチとか、ハムエッグスとかいう通俗つうぞくな英語名前の食品が並べてあつた。

客が好んで落ちつく長椅子ソファの隅すみ——罨わなはそこだ。その席上を一
つあけて隣の卓子テーブルへ彼女の一隊は坐すわつた。

彼女に惚ほれているコルシカ生うまれの給仕男ギャルソンが飛んで来て卓子を
拭ふいた。

「注文はなに？ ペルノか、よし、ところでたつた今、レイモン
がお前たまを尋ねて来たぜ。」

彼は何でも彼女の事を知っていた。彼女の代かわりに彼が金を貸し
てやった。

「どうせお前は持ってやしまいと思つて。」

商売仲間の女がそろそろ場を張りに来た。毛皮服のミアルカ、格子縞チエックのマルゲリット。そして彼女等らはリゼットを見るや「おや！」と云いつた。「化ばけたね。」とも云つた。

巴里パリへ来る遊び客は近頃商売女に飽あきた。素しろ人ららしいものを求める。リゼットのつけ目はそこであつた。

パパの鋸のこ樂が師くしと、ママンのマギイ婆ばあさんが珍らしそうに英語名前の食くものを食いっている間に入り代かわり立たち代えり獲えものは罨わなの座ざについた。しかし、英吉利人イギリスは疑い深くて完全に引つかからなかつた。アメリカ人がまともに引つかかつた。

巴里は陽気だ。

見せかけのこの親子連が成功するかしないかと樂屋がくやを見抜いた

商売女たちや店の連中、定連じょうれんのアップッシュンまでがひそかに興味をもつて明るい電気の下で見まもつていた。そして三人がいよいよ成功してそのアメリカ人を取巻とりまいて巢へ引上げひきあようとかかるとみんな一齊いっせいに、

「ヴィヴラファミーユ家族万歳！」

と囃はやした。その返礼にリゼットは後うしろを向いて酒で焦こげた茶色の舌をちよつと見せた。

アメリカ人を巢くろに引き入れて衣裳戸棚クローゼットの葡萄酒ワインの最後の一本を重く取り出した時リゼットは急に悲しくなつた。

レイモンは何してるだろう——彼女は自分に苦勞させてはぶらぶら金ばかり使つて歩く男がいとしくまた憎らしくもなつた。疲

れが一時に体から這^はい出した。

マジイ婆さんは鋸樂師のおいぼれを連れて自分の部屋へ引きとつた。彼女は妙にいらいらしていた。なんとかかんとか鋸樂師を苛^{いじ}めて寝かさなかつた。おいぼれは一^{ひと}晩中^{ばん}こごんで肝臟^{かん}を底^かつていた。

青空文庫情報

底本：「愛よ、愛」パサージュ叢書、メタローグ

1999（平成11）年5月8日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第十一卷」冬樹社

1976（昭和51）年7月15日初版第1刷発行

初出：「三田文学」

1932（昭和7）年8月号

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2004年3月30日作成

2013年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

売春婦リゼット

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>